

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	熊本地震における LGBT（性的マイノリティ）への調査と心のケア事業				
開始日	2017年3月26日	終了日	2017年9月30日	日数	180日間
団体名	LGBT-JAPAN		担当者名	田附 亮	

総額（税込）	4,995,000 円円	スタッフ人数	4人
--------	--------------	--------	----

事業目的	<p>同性愛者や性同一性障害などの性的マイノリティと呼ばれる LGBT（Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender、以下 LGBT）は、全体の約 7.6% にあたると言われている。しかし、日本国内における認知度の低さにより、これまで東日本大震災や熊本地震など被災地において、LGBT の方々が抱える悩みや課題などに着目した活動が取り組まれていないのが現状である。本事業では、LGBT 当事者の方々が相談しやすい環境を提供することで、LGBT 当事者が経験している被災地における緊急時及び中長期的な課題を抽出し、今後の災害対応に生かすとともに、活動を通じて LGBT の認知向上を目指す。</p>
事業背景	<p>2016年7月5日から8日までの4日間、Civic Force が運営するユニットハウス村及び熊本県益城町の仮設住宅を視察した。LGBT-JAPAN スタッフの主観とGID当事者の立場で見ると、男女二元論による LGBT 当事者への配慮不足が確認できた。滞在期間中、避難所運営における改善策を提案する一方で、LGBT 当事者として、私たちの活動を現地の方々に伝えきれなかった。視察を振り返り、LGBT という存在をさらに推し進めて活動する場所が必要ではないかと考えた。</p> <p>これまでの活動の経験から感じていた、「東京と地方都市での LGBT に関する情報及び理解度の差異」が被災地である熊本県でも存在することを実感した。しかし、LGBT 当事者への支援として、LGBT 当事者のみを対象とした「相談スペース」を設けることは、そこに入り出すことがカミングアウトに繋がってしまい、差別・偏見の対象になる恐れがある。そのことから当事者に配慮した対策とは言えないことから、LGBT-JAPAN が主体となって運営する LGBT 当事者に限定しないオープンスペースの提供が求められている。</p> <p>LGBT 当事者に限らず、被災者、支援者などが心休まれる場所を、LGBT 当事者である LGBT-JAPAN が提供する事により、差別・偏見の解消、また LGBT への理解促進を図ることで、被災地における LGBT 当事者がカミングアウトすることなく、話しやすい環境をつくることを目的としている。会話を通じたストレスの発散を促すため、飲食、メンタル部門での経験を効果的に生かせる移動式のオープンスペースの提供を目指す。</p>

事業内容	<p>1. コンポーネント① 被災地における LGBT 当事者が抱える課題、ニーズ聞き取り調査、企画策定のため 1 ヶ月調査をおこなう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6 か所開催⇒1 か所・関係機関に提供 ・ ガイドライン作成
	<p>2. コンポーネント② LGBT の認知向上に向けた広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育機関や団体と連携 ・ 講演会や交流会 ・ オープンスペースでの情報発信
	<p>3. 熊本県内及び九州地方における LGBT 実態調査と関係機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査してリスト化 ・ 1 団体以上と連携 ・ 講演会や当事者との交流会

2. 事業の評価（評価者：公益財団法人佐賀未来創造基金・山田健一郎）

最終評価実施日：2017年12月21日

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

【コンポーネント①】

- 震災から数カ月後の7月に現地視察に入り、9月に入ってから活動だったので、ある程度 LGBT へのニーズが高まる可能性が高い段階だったように思われるが、それ以上に現地の仮設住宅の状況やニーズ変化、そして疲弊感なども重なり、当初の想定していた通りに全体的な事業実施が進まなかったことが多かったように思える。
- LGBT の認知度を上げていくことそのものが現状の課題となっているので、今後は災害初期から CF と連携した性的マイノリティ等の方々への被災地支援活動に期待したい。
- 最初に現地視察してニーズや仮説を立ててからの活動は手順としてよかった。実際の活動に入ってから事業目標の変更などのニーズに応じた柔軟な対応は評価できるが、その中での仮設や成果設定の再検討が必要だったように感じられる。時間的に可能であれば最初の現地調査やニーズ検討をもっとしっかりと行いエビデンスをしっかりと持ってから実施できればよかったように感じる。

【コンポーネント②】

- 認知度向上としてはある程度、落ち着いてからの良いタイミングであったので適切な時期だと思う。
- しかしながら、各現地によって状況は違うので結果として事業実施の際に難しい状況が生まれていた。

【コンポーネント③】

- 時期的なものなのか、周囲との連携なのか、現状のニーズなどの想定とのずれなのか、講演会などの周知が届かなかったのかわからないが、結果として集客が少なかったことが残念だった。

(b) 有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

- オープンスペースの目標回数は6回を目標に設定していたが、今後の復興を意図しての有料開催や現地の各状況などが要因で、6カ所の開催が困難で、ひとつの仮設のみでの実施であった。エリア縮小や狙っていた効果は量的には減少したが、1カ所でもモデル的に行えたことが今後につながる成果であったと考えられる。
- 初回の講演会は大変好評で、2回目は結果として参加者はいなかったが、開催自体に十分なニーズはあるとの手ごたえを感じた。今後に期待したい。
- 現地の状況を考慮して、交流会未開催、アンケート調査未実施・ガイドライン作成の未達成など未達成の部分は多かったように思われる。しかしながら、現地の状況を考慮してのことで、理由は納得できる。達成できなかった背景には、最初の調査不足や課題解決の仮説の設定の甘さが招いたように思われる。代表自身も深く学びを得て、今後の機会に活かせると思っているので今後の取り組みでは、ぜひしっかりとした調査と目標設定を行ってから事業実施に取り組んでいただきたい。
- 今回の事業を通じて、今後の災害時における効果的なLGBT支援のための体制整備の礎になっていくことを大いに期待する。

【コンポーネント②】

- モデル事業として災害時にはなかなか手が届きにくい緊急時でのLGBTの方々への支援活動を考えるきっかけになった大きな一歩である。今後の実践現場での連携を期待したい。
- 振り返りや成果報告会、そして意見の取りまとめと提言などがしっかりと実施できているかが今後の展開への課題である。今回の一連のプロセスがモデルになり、地域の財産になり、2次的効果として現地での広がりがあったかが大切なのではないかと考える。

【コンポーネント③】

- 当事者団体との連携は双方の状況もあり、あまり進まなかったが、多様な支援団体と連携することで LGBT の方々をはじめ被災された方々への支援が進むことがわかり関係先をリスト化できたことがよかった。
- 仮設団地でのイベント開催は、住民との交流を通じて LGBT についての質問なども多く LGBT への理解を深める良い機会になった。仮設団地の畑の手伝いや夏祭りなどの大きなイベントの手伝いなどが実施されて LGBT の方々と接する機会が自然に生まれていたことが有効だった。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

【コンポーネント①】

- 最初の調査が期間も短く、調査の深堀りができなかったことがアウトプットを大きく出せなかった要因だったように思える。
- 手法そのものは正しいが、工夫点としては実施期間を短くするか、もしくは調査そのもののみが今回の事業にするなど、最初の調査を徹底して実施することで LGBT の実態把握や困難状況やニーズが把握できればよかった。そうすることで、仮説の再設定がしやすくなったのではないかと考える。
- LGBT は広げられたが、被災地支援に関してのインパクトはモデル初期段階で大きくはなかった。しかしながら、今後につながる経験や対応策などがわかったことと、今後の災害復興支援の際にはシビックフォースなどと連携して LGBT 窓口が設計されていくことを大いに期待したい。

【コンポーネント②】

- ニーズ調査からはじまり、事業実施という形を当初から想定して実施していたことはよかった。現場の状況に合わせて事業を組み替えたり、時にはやめたりと被災者のニーズに寄り添った事業実施をすることで現地との信頼関係が築けたことは、今後の認知を上げるうえでの最初の展開としてはよかった。
- 当団体の反省点として挙げられている講演会の参加者が少なかった要因の一つは、開催にあたっての日時設定や告知を、外的要因を考慮したために実施できなかったことが挙げられる。今後の改善に期待したい。

【コンポーネント③】

- 前述したように当事者団体との連携はあまり進まなかったが、多様な支援団体と連携することで LGBT の方々をはじめ被災された方々への支援が進むことが事業を通じてわかり、支援関係先をリスト化できたことは今後の財産になる。

- 公式な交流会という形ではなかったが、仮設団地でのイベントはじめ、畑仕事や夏祭りなどの手伝いを通じて自然と交流が深まり相互理解の良い機会となった。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

【コンポーネント①】

- 被災地コミュニティとの連携はシビックフォースからの紹介もあり、非常に円滑だったと思われる。また、多様な人と接する機会が多いが、事業実施者のコミュニケーション能力が非常に高いため、現地の方々との信頼関係を築くことも自然にできていたように思える。
- 特に仮設団地での信頼関係の深まりは本事業の成果ともいえるのではないと思う。関係性構築が災害時や復興支援においては非常に重要な点でもあることから、現地の状況を確認したところ素晴らしい取り組みだったと感じる。
- 終了時のタイミングは、未達成事業も多く、もう少し期間があればと感じることが多い。今後も引き続き事業達成に向けて現地とも関わり続けていただければと思う。

【コンポーネント②】

- 仮設団地などピンポイントでは非常に連携は取れていたように感じるが、広域的な広がりや連携を考えると、当事者団体同士の連携の難しさや異分野である教育機関との連携というハードルの高さから、現時点では被災地コミュニティとの連携は難しかったように思われる。
- 地元団体の交流会に参加して広げていくというアプローチはよかったと思う。広報活動という観点で考えると広報はチャレンジと改善を繰り返すことで最適化していく作業でもあるので今回の経験を通じて LGBT についてよりよく広げていってほしい。

【コンポーネント③】

- 県外からの支援団体ということもあり、現地の当事者団体との連携はあまり進まなかったように思われる。しかし、仮設団地での信頼関係構築や多様な支援団体と連携することはできていたので、今回の経験を糧に今後の展開を期待したい。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

【コンポーネント①】

- 本来の LGBT 当事者の「困り」を救うというニーズ調査活動を通じて、LGBT そのものを知ってもらうことや認知の状況を変えることが今回の事業を通じて、ある程度はできていたと感じる。また、事業時の反省や今後の展開を考えるうえでは、LGBT JAPAN の基盤強化に繋がったことが当初の目的外に得られた効果ではないかと考える。

【コンポーネント②】

- このチャレンジそのものが、日本で初めての試みで、今後の災害時の認識や LGBT 当事者への投げかけ、そして、LGBT 業界へ一石を投じて地域の中で知ってもらえたことが、今までの熊本をはじめ、全国にもない新たな価値がモデル事業として創られたことと、事業を通じて地域での連携などへの課題が捉えられたことは今後の広報活動などを含む事業展開としては大きな効果があった。

【コンポーネント③】

- 現地の LGBT 支援団体があまり存在しないことがわかり、今後は研修会や講演会にも更に力を入れていくだけでなく、被災地支援団体への LGBT の専門的視点を持ったユニバーサルデザイン避難所の支援をどう組み込んでいけるかが課題となる。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- 調査の手法に特段新しい手法があったわけではないが、LGBT という視点はユニバーサルという観点からも新たな取り組みで、今後の他被災地のモデルとなりえる事業である。
- 仮設団地で有料のバーをするなどの試みや LGBT の講演会や交流会など、新しい概念を基に既存の手法をうまく組み合わせた事業設計であった。
- シビックフォースや現地団体、全国の LGBT とのネットワークなど今回の事業を通じて、今後モデルになっていくと考えられる。団体の基盤を強化して継続することは大変さを抱えながらもしっかりと覚悟を持って運営することで他被災地のモデルとなると期待する。
- 今後の現地団体との連携に課題は残るが、潜在的ニーズも高く他地域での広がりが期待できるモデルとなる事業である。
- 振り返りや成果報告会、そして提言書などの事業や課題等の整理がしっかりできていることから汎用性の高い広がりが期待できる事業である。

3. 評価者の所感

LGBT 当事者団体が被災地の当事者のために復興支援に立ち上がったことは日本で初めての先駆的モデル事業である。仮設団地を含めた被災地には LGBT の方々がいるという前提がなく、ユニバーサルな観点からも難しいという実態がある。そこに焦点を当てた今回の事業は今後の被災地でのモデルとなる事業であった。

今回の事業を通じて地元中間支援組織である熊本市市民活動支援センター「あいぼーと」の方々や馬水東道仮設団地の方々との関係性構築がしっかりと築けたことで、信頼関係資本に基づくしっかりとした LGBT の広がりが期待できることを現地の方々とのコミュニケーションを見て感じ取れた。

しかしながら、事業そのものには改善点が多かったようにも振り返る。先駆的な事業であればあるほど失敗はつきものである。だからこそ今回の事業の成果や失敗、そして、リーフレットやWEBなど具体的改善策から団体自体の組織基盤強化、そして今後の展開などを整理して報告としてまとめていただき自団体WEBなどでも公開していくことで次にチャレンジする自団体のみならず今後の他被災地のためにもぜひ広げていってほしい。

最後に、今後他地域での災害対応時には緊急支援・復興支援団体と連携してLGBTの視点や考え方、当事者の在り方などを被災地での支援活動にぜひ導入展開できることを期待したい。